

(1) 令和3年度学校評価アンケートの分析

最初に、学校関係者評価アンケートについて分析を行う。学校関係者評価は、生徒・保護者・教員という学校の教育活動に関係する者を対象者に実施される評価で、「学校の教育活動の総点検を行い、学校の教育活動の強み・弱みを明らかにし、今後の教育活動に役立てること」を目的として実施されるものである。つまり、学校を「人間ドック」ならぬ「学校ドック」に入れて、総点検を行う作業であり、PDCA サイクルのCにあたる作業である。今回は、生徒のアンケート結果をもとに、①総論②学習③進路④生徒指導⑤自主活動⑥地域のモデル校という6つの観点から述べていきたい。

①総論

総論として取り上げるアンケート項目は、

「附属中学校での学校生活に満足している。」(全生徒の肯定感 95.5%)

「附属中学校で学んで、人として成長したと思う。」(全生徒の肯定感 95.9%)

の2つである。二つの項目の肯定感同に全体の肯定感平均の83.2%を大きく上回っている。この結果は、附属中学校の学校教育は極めて正常に機能していることを示している。満足度と併せ、「人としての成長」を実感している生徒がほとんどであることは、学校としての社会的機能が十分に機能していると判断してよく、この肯定感の高さを我々は自負してよい。

②学習

次に学習についてである。この点は、i) 教師の授業力という観点とii) 生徒の学力の伸長という観点で示したい

i) 教師の授業力について

教師の授業力については、次のアンケート項目を取り上げる。

「授業などの適切な場面でICTなどの機器を活用している先生が多い。」(全生徒の肯定感 96.8%)

「授業を工夫し、分かりやすく教えている先生が多い。」(全生徒の肯定感 95.5%)

「授業では、自分の考えをまとめたり、発表することがよくある。」(全生徒の肯定感 80.9%)

「学校は、自分の学習レベルに応じた教材や学習方法を提供してくれる。」(全生徒の肯定感 81.8%)

「学校は、自分で計画を立てて学習するように指導している。」(全生徒の肯定感 86.8%)

以上の結果からわかるのは、先生方の授業に関する評価は高いと言えることである。とくに**「授業を工夫し、分かりやすく教えている先生が多い。」(全生徒の肯定感 95.5%)**という評価は、我々教師の日々の授業が高く評価されており、自信を持って良い。また、ICTの使用についても高い評価を得ている。

次に**「自分の考えをまとめたり、発表することがよくある」**の肯定感80.9%、**「個別最適化」**の肯定感81.8%、は高い評価を得ているが、全体の肯定感の平均を若干下回っていることは見過ごせない。「主体的・対話的で深い学び」がこれからの学習の中心スタイルになる中で、課題として受け止めなければならない。さらに、個別最適化については、更に重点項目として受け止めなければならない。なぜなら、次のii) 生徒の学力伸長に課題があるからである。

ii) 生徒の学力の伸長

生徒の学力の伸長に関しては、次のアンケート項目を取り上げる。

「附属中学校で学んで、学習の内容を理解できるようになった。」(全生徒の肯定感 92.3%)

「授業や学級活動等で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。」(全生徒の肯定感 91.4%)

「学校の授業だけで、進路実現に必要な力がつく。」(全生徒の肯定感 72.3%)

「自分の意見を論理的に述べることができたり、根拠を示しながら意見を言うことができるようになった。」(85.9%)

学習内容の理解や、表現活動については、90%を超える肯定感で、評価は高い。その一方で、進路実現に必要な力について、学校の果たしている役割は低いと言わざるを得ない。最先端の教育研究が附属の任務であることには変わりはないが、我々の目の前には将来を担う中学生がいることを忘れてはならない。我々の教育研究活動が、目の前の生徒の学力伸長に寄与していないならば、それは我々の研究が独善的であるという批判も受け入れざるを得ないであろう。我々が教育研究活動を進める上で、今後十分に気を付けなければならない点である。

また、「主体的・対話的で、深い学び」において、「深い学び」に課題があることは、我々の共通認識になっている。多くの生徒の発表は、「調べ学習」の域を出ておらず、深い学びが十分にできているとは言えない。「深い学び」に関する項目が、85.9%と全体の平均点を上回っているとはいえ、「何が深い学びなのか」をどこまで分かっているのかという点から検証をしなければならない。

③進路

進路指導に関しては、次のアンケート項目を取り上げる。

「学校は、将来の夢や希望の実現に向けて努力するように指導している。」(全生徒の肯定感 83.6%)

「働くことの意味や職業について考え、理解が深まる機会が多い。」(全生徒の肯定感 75.9%)

「自分の適性や進路について考える機会が多い。」(全生徒の肯定感 79.1%)

「学校は、将来を考えたり調べたりするきっかけや情報を提供している。」(全生徒の肯定感 80.5%)

かろうじて、全生徒の肯定感の平均を維持しているのは、進路に関する全般的な指導であり、個々の具体的な取り組みに関する項目は、平均を大きく下回る項目がある。これは、本校のキャリア教育に関する本質的な問いかけと受け止めるべきである。1・2年生で3学期に「キャリア探究総合」「職場体験実習」を実施しているが、この取り組みが生徒にはキャリア教育と受け止められていない可能性が高い。根本的にどのような内容で取り組むかを考えなければならない。

④生徒指導

生徒指導で取り上げるアンケート項目は、以下の項目である。

「学校生活について学校の指導には納得できる。」(全生徒の肯定感 90%)

「学校は、日頃から生徒たちの問題(いじめなど)の早期発見に取り組んでいる。」(全生徒の肯定感 82.3%)

「学校は、学校や社会の決まり・マナーなどを守るように指導している。」(全生徒の肯定感 93.6%)

「学校は、インターネットや携帯電話の危険性やルール・マナーを指導している。」(全生徒の肯定感 94.1%)

「悩みや困ったことなどを相談できる教員、養護教諭、カウンセラーなどがある。」(全生徒の肯定感 79.1%)

進路指導と比べて、生徒指導に関しては、肯定感が高い。本校の生徒指導が正しく機能している証である。特に、総論の「生徒指導の納得感」が90%に達していることは、注目すべき値である。ただ、いじめ問題については、学年によって肯定感に差があるので、この点は検証を行わなければならない。深刻なのは、教育相談体制である。全体の肯定感が平均以下であることと同時に、学年差も大きい。この点の検証も併せて必要である。

⑤自主活動

自主活動で取り上げるアンケート項目は、以下の項目である

「学校は生徒会活動が活発になるように工夫している。」(全生徒の肯定感 90.9%)

「学校は体育大会や友誼祭が充実するように工夫している。」(全生徒の肯定感 89.1%)

生徒指導と併せて、肯定感が高いと言える。新型コロナウイルス感染拡大によって、十分な活動が行えない中での肯定感であるので、我々の自主活動の取り組みは評価されていると言える。

⑥地域のモデル校

地域のモデル校で取り上げるアンケート項目は、以下の項目である。

「学校は、積極的に地域と連携し、地域のモデル校の役割を果たしている。」(全生徒の肯定感 71.4%)

「自ら課題を発見し、自分の身の回りから社会を変革する力がついた。」(全生徒の肯定感 85.5%)

「附属中学校は、SDGsに積極的に取り組んでいる。」(全生徒の肯定感 90.9%)

我々に衝撃を与えたのは、「地域のモデル校」の肯定感が71.4%と、極めて低いことである。我々附属校のミッションでもあり、存在意義でもある「地域のモデル校」の評価が、これほど低い評価であることを我々は真摯に受け止めるべきであろう。附属中学校が、定員割れを長年繰り返し、その結果、様々な課題を内包する中で、「地域のモデル校」ではなく「地域の受け皿校」として認識されていることが、改めて認識させられた。

このことについての進むべき道は、例えば、SDGsの取り組みに関する肯定感であり、「社会の変革する力」が90%には達していないが、平均を超えている点にある。我々が決断した国際バカロレア認定校は、このような取り組みを包括的に取り組む教育プログラムであり、ここにこそ、「地域のモデル校」となる道筋を示しているといえる。また、違う調査であるが、今年度広報活動に参加した保護者を対象にしたアンケート調査でも「国際バカロレア化」と「探究学習」に、群を抜いて魅力化を感じている。

(2) 学校関係者評価から見える本校の到達点

以上①～⑥の項目で、学校関係者評価からわかる到達点を明らかにしてきたが、概括すると以下のような

①学校全体の満足度や学校としての機能は十分機能している。教科指導、生徒指導、自主活動についても満足度が高く、我々が実践している事を維持しつつ、さらなる高みをめざさなければならない。

②その一方で、進路指導については、キャリア教育の視点から見直すべき点はある。さらに、個別最適化教育の観点から「個に応じた学力指導」に課題があり、進路実現に向けた学力向上についても意識的に取り組まなければならない。

③さらに、深刻なことは、「地域のモデル校」という附属校としての大きなミッションの肯定感が低いことである。

長年の定員割れの継続により、本校が「地域の受け皿校」として少なからず認識されていることが、改めて認識された。

(3) 第三者評価について

本年度、学長命により第三者評価を実施した。学校経営コースの院生による評価である。報告は、①「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした協働的な学びの推進 ②支援を必要とする生徒に配慮した環境整備と指導体制の構築 ③大学附属学校の強みを活かした学校経営の推進の3点で行われた。個々の点においては指摘もあったが、総じて附属中学校の教育活動は、

多くの生徒は基本的な生活習慣や学習に向かう態度や習慣が定着しており、さまざまな教育活動が生徒主体で行える素晴らしい学校である。その学校を支えているのは、校長、副校長をはじめ、全国から派遣されている高い指導力をもった教職員である。新学習指導要領全面実施1年目で、協働的な学びを取り入れた授業がどの教科においても実践されている点を見ても、質の高い教育活動が行われていることは明らかである。学校として取り組むべき課題が明確で、統一した指導体制が作られている。

と評価された。高い評価を得たが故の「さらなる高みをめざす取り組み」として提起されたのが、小中連携である。中長期的課題として取り組んでいかなければならない。

この小中連携については、小学校で行われている教育と中学校で行われている教育に、特に生徒指導面でギャップが大きいと感じる部分がある。第三者評価には、文章表記されなかったが、校長室で院生と懇談をしたとき、ある院生は、

「小学校を視察したとき、その自由さに驚いた。もっとしつけが必要と感じた。このように育った児童が、中学校に入学してどのように過ごしているのか、ある意味興味をもって中学校を視察したが、驚くべきことに、とても落ち着いた学校であった。どのようにすれば、このように落ち着いた学校になるのか、あの小学校で見たあの子たちは、どのように変わるのか？」

という問いであった。このような教員の視点や資質・能力にギャップが存在すれば、このギャップを解消するところから始めなければならない。

また、附属中学校は、R4年度から国際バカロレアをめざすことになる。我々は、R3年度に「附属中学校の今後の未来」の議論を積み重ねてきた。その結論が、国際バカロレアである。我々が積み上げてきた教育研究の実践と国際バカロレアのめざす教育プログラムは同じベクトルを向いている事、さらに国際バカロレアの教育プログラムを取り入れることにより、我々が強みとしてきた探究的学びがさらに強みを増すこと、また概念教育のコンセプトを取り入れることにより、「より深い学びの実践」や「教科横断型プログラム」を進められることが明らかになった。この路線について、幼小附属学校園が理解することが、今後の幼小中連携の基盤になると、我々は認識している。